

生きもののいのちを 想うなかで



山本一成, 宇治福祉園, 杉本一久 (2025) 『ひびく まざる わきだすーLife (生活・人生・生命) を深める保育実践理論の探求』全国私立保育連盟保育・子育て総合研究機構委託研究最終報告書
<https://www.zenshihoren.or.jp/activity/kenkyu.html>

・このときカナブンは、子どもと保育者それぞれにとってどんな存在だったのでしょうか？

・保育のなかで、いのちのつながりを感じる機会はありますか？

・今日食べたものがどこからやって来たものか、園で捨てられたものがどこへ行くのかを考えてみたことがありますか？

『せっかく出てこれたのに、踏まれたら…』

園庭にいた私に「ほら。」と、手のひらに乗せたカナブンを見せてくれた4歳児の男児。私に向けられた視線はすぐカナブンへと戻り「可愛いやろ。」と、歩くカナブんに合わせ、手をゆっくりと動かしている。「家から一緒に来てん。お父さんが捕まえてくれた。」と笑顔で話してくれた。

「上手！上手！」と指先まで来たカナブんに言葉をかける。そして「ほら、こっちの足怪我してるねん。でも上手に歩けはるで。」と、左前脚を見せながら教えてくれた。「可愛いな。ずっと一緒にいるねん」とカナブンをみつめている。近くにあった木の枝にカナブンを乗せた。「よーいスタート！」ゴールとなる枝の天辺まで登りきったカナブン。彼は嬉しそうに「すごい！上手やな。」と言葉をかけていた。

すると「もうすぐ、ご飯やろ。それまでは一緒にいる。」と呟いた彼。私は「うん。もうすぐご飯やな。」と答えた。「可愛いから。ご飯までは一緒にいる。でも、ご飯になったら、逃がすわ。木が好きやし、木に！」そう言うと、カナブンを木の枝から自分の手に戻した。

友達が「そらの部屋行くな！」と、彼に伝えに来た。そろそろ昼食の時間だ。一緒に逃がす場所を探すことになった。本当は自分たちが育てている野菜に逃がしたかったが、すぐ見つかる為、やめることになった。櫟の木は、蟻が沢山歩いている。また蜘蛛の巣があった為、断念。次にグミの木を選んだ。「抱っこして、みんなに見つからないところに逃がしてあげるから。」と頼む彼を抱き上げる。彼はそっとカナブンを木に置いた。すると、カナブンは木にくくり付けられた縄の上を綱渡りのように歩き始めた。その姿を見た彼は「危ない！助けてあげて！はやく！」と言う。私はカナブンを助ける為、彼を下ろそうとしたが「見えへん！抱っこしたまま！もっと上にして」と…。私は彼をより高く抱き上げた。彼は手を伸ばし、カナブンを掴んだ。そして、別の枝にカナブンを「先生、見といてな。」と言い残し、昼食へと向かった。

カナブンを見る彼の優しい目とカナブンを思う彼の温かな言葉が印象的でした。

後日談です。

カナブンエピソードがあった日の帰り道。アスファルトの道を横断するセミの幼虫を見つけました。駅が近いこともあり、バイクや自転車の往来が激しい道。『せっかく出てこれたのに、踏まれたら…』と思うと、居ても立っても居られなくなり、持っていた傘を倒して壁を作り、誘導することに。夜道で一人、傘を動かしながらセミに「こっちこっち。」と言葉をかけている自分の姿を可笑しく思いながら、日中の男児の姿と言葉を思い返していました。彼との触れ合いが自分の中にも生きているのだ。と感謝の気持ちと喜びでいっぱいになった時間でした。(セミは無事、渡り切って近くにあった木の板を登って行きました。)